
もっと... [Love me,please.]

tatsuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もつと:「Love me , please .」

【Nコード】

N7744M

【作者名】

t a t s u k i

【あらすじ】

この物語はある一人の少女の恋愛物語です。想像しながら読んで下さい。

物語の開花

真っ赤な空、真っ赤な夕日、私は何時もの様に部活を終えて体育館の廊下辺りに座りながら空を眺めている。

えっ、私は誰だっけ!? 私の名は“有沢たつき”、今高校2年生。本名は“有沢竜貴”という読み方は同じだけど名前のところは漢字がない。何故なら私は自分の名前を見ると可愛くないと思って、名前を書くときは漢字ではなく平仮名で書くことに決めたから、今の私の名前は“有沢たつき”なんだ。

まあ、私の名前のことは良いとして、私は此処最近自分でも分からないけど、悩み事が少しあって、それでね別に相手に恨みなんて思っていないただ…自分が独りになったり遠く離れたり…まるで私が弱く衰えているように感じてるみたいなんだ。

私はそのことを悩むと何故か溜め息が多くなって、「私って何馬鹿な事を考えてんだ。」と思うぐらい辛く感じた。そして私はそのことを悩んだら自分が弱くなっていくから思い出さないように着替えて家に帰って忘れたい気分でシャワーを浴びたいと考えた。それを考えて決めた私は立って部室の更衣室へ向かおうとしたら

「あ、たつきちゃん、お疲れ。」

そこに現れたのは中学からの友達、織姫だった。私が中学の頃、織姫は当時虐められてね、私はあの娘が虐められてるのを見て「助けなきゃ。」と強く思ってあの娘を助けたんだ。まあその出来事のきっかけで私と織姫は友達関係になって今でも一緒だけど…

「ああ、お疲れ。」

「アレ、たつきちゃん。元気ないけどどうしたの？」

織姫は私を心配して話しかける。

「いや…私大丈夫だから心配してくれてありがとう織姫。」

別に私はそんなに元気がないってのはないけど、織姫もみんなでもよく言われる。どうしてだろう…私…顔に何か付いてるのかな…それとも何時もため息を付くからかな…

…と私はそう思った。

「あつそうだ！この前に行ったレストランで例のデザート、もう一度食べに行く？」

私は前の事をふと思い出して織姫に言った。アイツは例のデザートを食べたら「おいしーい！」と絶賛してたから、織姫もまた喜ぶだろうと思っていた私だが…

「その件の事なんだけどね、黒崎君も一緒に連れて来ても良いかな？みんなと一緒に例のデザートで食べに行こうと言ってたけど、茶渡君や石田君が用事があるから来れなくて、黒崎君は仕方なくOKと出したから良いかな？」

織姫はそう言ったら、私は何だか心が少し寒気を感じて驚いた。

「…そうなんだ。一護達に言ってたんだね。」

おどおどする私は織姫に言っと

「うん。」

と織姫は気にしていないように一言で返事した。そして私達はレストランへ着き、例のデザートを頼んだ。

「久しぶりだよな、俺がお前と一緒に此处で食うのは。」

今喋ってきたのは一護という私の幼なじみの友達でね、昔は私が空手道場に通ってた頃初めて会った頃から「生意気なガキだな」と思ってたしにやってみたら負けてね。それが稽古終わった後、一護のおばさんが来て見たら「キレイ」と思ってた、あんな母親見るの生まれて初めて驚いたけど、アイツが泣いた後元気に笑うのを見て私は「男が泣きながら笑うんじゃない。」と思ってたけど、アイツが9歳の頃母親が事故にあってね泣いていたけど、そのせいでアイツは幽霊に見えるようになったり、中学に入ってから背が高くなったり喧嘩が強くなったり、アイツは昔から別人へと変わった感じだった。

後…

「まあ、死神のアンタにはそう言うかもしれないね。」

アイツが死神である事は私は驚いたわ。織姫が拉致された事で私は一護に直接聞いたけど、一護に酷い一言で私は激しく殴って怒鳴ったわ。そのせいで廊下に響き渡ったけど、浅野に止められたお陰で自分の怒りが段々へと治まったんだ。

その後は一護に追ってたけど…ごめん、これ以上語ると長くなるから続きは後にするね。

「なんだその言い方は！俺が死神なのが悪かったのか！？」

「別に悪くないよ。私はただアンタが死神であることが凄いから誉めただけよ。」

「たつき、てめえ……」

「落ちていて黒崎君！折角黒崎君の為に誘ったんだから怒らないで！」

「気にしないで織姫、どうせ落ち着けば頭が冷やすからホッとしても良いよ。」

私は会話の中で一護にツッコんだら織姫は困った表情で私をジーツと見つめながら怒っている。なんか私、変なことを言っているみたい。そう思うと私は織姫の機嫌を治すために

「……しょうがない、私がアンタ達におごってあげるからそんなに怒らないで。それにアンタ達、もう付き合ってるんだから遠慮なく頼んでも良いよ。」

「たつきちゃん……」

と私は笑顔でそう言っていると織姫は少し恥ずかしながら横下を向いて

「たつきお前なあ……」

一護も恥ずかしながら織姫とは反対に横を向く。

そうこの二人は今年の1月ぐらい付き合い始めてから3ヶ月ぐらいかな。何故そうなったのかは私は知らないけど、多分一護が藍染という男を倒した後に織姫と付き合い始めたと思う。それで……それで……

「良いのかたつき、俺達におごってもらって。」

「良いの良いの、そんなに気にしないで。私はただ二人の気分を和らぐ為におごったんだ。ありがたく思えよ。」

「気分って、意味わからねーよ。」

「今あったことをよく思い出せば分かるから。」

私が一護に教えた後は

「それじゃあ一護、織姫、私先に帰るから何かあったら連絡してね。」

と手を振って伝えてから帰る私だった。

「…何なんだアイツは!？」

「まあしょうがないよ黒崎君、私も怒りそうだったけど、たつきちゃんはそのを気づいておごってあげたと思う。」

「どう言うことだ井上。」

「実はね…」

家に着いた私は部活で練習した汗を流すために制服を脱いで、浴室に入り、シャワーを浴び続ける。

すると今日織姫達と一緒に行ったことを思い出したら…

「やだ私、何で泣きたくないのに一粒出るだろう。」

何故か泣きそうな表情を浮かぶ。忘れたくても中々出来ず、結局上がった私は汗と疲れ以外悩みを流すことが出来なかった。

そしてご飯食べた後私は部屋に戻って布団に入って

「もしかしたら部活のせいで悩みが浮かんたかもしれない。」

と思いすぐに寝た私。だけど…

あれ…ここはどこだろう…私…何時の間に机に寝てたのかな。

私が起きてよく見たら何故か教室の机に寝てて、周りには私だけ一人だった。しかも時間は放課後。私は何故寝たのか知らないけど部活のことを思い出して急いで走って、体育館の近くに通ったら

あ…織姫と一護だ。おい、織姫！一護！

と二人を叫んだら…

私をクスツと見て笑い、そのまま立ち去る二人。

私は少し笑ったけど、何故か心は晴れない気分だった。

一護達や仲間達が私の距離を離れていき、私の周りには黒く染まっていき、ただ孤独になると怖く寂しく感じて、体育座りしてそれを消えるのを待っただけだった。

何時の間にか一人になった私はそれを消えることが出来ず、怖いから目を閉じて恐怖心を逃そうと堪えていたら…

目を開けると朝の光が照らして、起き上がると私の部屋だった。

「…何だ、夢だったんだ。」

どうやら私は悪い夢を見たらしい。いや、悪い夢より変な夢を見たって言うかな。

その後私は着替えて顔を洗ったり歯を磨いたり朝食を取って家に出た後、歩いているときにメールが来ていた。

「誰だろうこんな朝から。」

私は早速携帯を開いてクリックしたら、織姫のメールだった。

「もしかして昨日のことで来たのかな。」

私は恐る恐るメールを読んだら、予想通りだった。

『おはようたつきちゃん（*^o^*）』

昨日はたつきちゃんが黒崎君に悪口を言ったのを少し怒りそうだったけど、たつきちゃんが場の空気を壊さないようにおごってくれたのは感謝するけど、別に無理しなくてもいいんだよ。

だってたつきちゃんは黒崎君と幼なじみだからタメ口してもいいよ。

昨日怒りそうだったけどごめんね（＜―＞）

織姫より。』

「織姫ったら…」

私は織姫に返信する。

『おはよう織姫。』

昨日もアンタが少し怒っているのを見たから落ち着かせようとやったんだ。まあそのせいでお金が減ったけどね（T―T）

あともし私の態度が酷かったらガツンと言っても良いから。もしたら私がそれを気を付けるから。』

と打って織姫に送信した。

そして学校へ着いた私は…

「あ、オッス一護！」

「おはようたつき！」

一護とばったり会う。どうせ一護は昨日のことで文句を言うだろうと思っていた。しかし…

「昨日、井上がお前が俺達のためにあんな事してたのを話して、俺…全然気づかなかったから悪かったな。」

一護が私を謝ってくれた。あんな一護、今まで謝ってくれたのは久しぶりだった。

「いいよ謝らなくて。私はただあんたにタメ口してたら織姫が少し怒り気味だったからやったのよ。それにアンタ、織姫と上手くいってる？もし織姫を悲しませたらアンタを殴るから、OK？」

「わかったよ、井上と上手くするよ。ありがとな、たつき。」

一護が口元を笑みに浮かび、私を感謝した。

「良いつて事よ。」

そして私は言葉を返した。すると

「あと、お前に言いたいことがあるけど…」

一護が私に何か言いたい事があるそうだ。

何だろう…一護が珍しく聞くなんて。

そう思うと一護は真剣な目で言う。

「最近お前さあ…みんなから心配されてるけど、何かあったのか？」

え、私が！？驚く私は一護に心配をかけないように

「べ…別に何もないけど。ただ私は普通通りだからさあ、気にしないで。」

そう伝えた。それを聞いた一護は

「…そっか…お前が心配している事を聞いただけだから相談を乗ろうと思つて。だから…何かあつたら誰でもいいから相談しろ。」

私の為に応援してくれた。心配してくれたのはありがたいけど、私…大丈夫だから気にしないで一護。私…強い女のくせに元気をなくしたら自分の存在が悪くなるから気にしないで…

…そう思つた私だつた。しかし…

「今日の稽古はここまで！」

「ありがとうございます！」

私が部活を終えて着替えた後、今日はゆっくりと門外へ出ようとしたら

織姫だぁ…

私は織姫に呼ばうと声を上げたら

「井上！待たせたな！」

「お待たせ、黒崎君。」

一護が私より織姫を呼びかけて、それで織姫と一護は会話しながら帰って去つた。私は昨日見た夢を思い出して元気をなくす。

まただあ…何で私は強い女のクセに鬱になるだろう…

そう思ったらいつの間にか体育座りをして俯き、瞳は半開きしたまま黙る。

どうしよう…どうすれば私…それを解決する事が出来るのかな…
なんか私…このままだと自分の存在が消されていく…

考える私、すると私の前にゆっくりと尋ねてきたのは…

物語の開花（後書き）

どうも tatsuki です。恋愛には詳しくありませんが初めて恋愛作品を投稿しました。

今回の作品のテーマは“恋愛”です。その中で主人公を演じるのはたつきです。実は tatsuki という僕の名前は本名ではなく、名の由来は彼女の姿がカッコ良かったので芸名として付けました。

ちなみにこの作品が投稿する10日前にたつきの誕生日で投稿する予定だったのですが、間に合わなかったので延期になったことは残念でした。

余談ですが、この作品が誕生する三ヶ月前にKに出て来るMとKがXXXXXXXXの話執筆する予定だったのですが、読者の皆さんに思われたくないので中止しました。
ちなみにジャンルはエ。です。

それじゃあこの作品を読んで良かったと思った方感想をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7744m/>

もっと... [Love me,please.]

2010年10月9日06時23分発行